

「闇　の　あ　と　に」

——自存について——

加　茂　映　子

On 'After Dark'
A Study of Self-existence

Eiko KAMO

ABSTRACT: Adrienne Rich is an American woman poet who was born in Baltimore, Maryland, on May 16, 1929. Her father, a doctor, was versed in literature, and he had an extensive library of Victorian, especially pre-Raphaelite, authors. He encouraged Adrienne to read and write poetry.

On her part, she was bright enough to answer his expectation. Actually, she said, "For about twenty years I wrote for a particular man, who criticized and praised me... I tried for a long time to please him, or rather not to displease him." Such a relationship of Adrienne to her father must have developed in her a heavy oppression owing to him, as well as a deep feeling of filial affectation and respect toward him.

'After Dark' is an elegy to him. This paper discusses in the wake of his death, how Rich, as a person of full growth, recognized and realized the meaning of her father's existence.

Once her father as a patriarchal power almost maimed her creative self. Now she admits that her father is "the tree of life" whose fruit is Adrienne herself. He has always been what Adrienne had to struggle with. It can be said, however, that her self-existence was achieved only through that struggle. She decided to take over the meaning of his existence from then on both by struggling against and protecting the world, which partly embodies her relationship with father. Now she accepts him and his death. It is the course of nature.

時の流れは悠久であり、人の一生はその流れに浮かぶ、うたかたに過ぎない。とはいえ、いやそれゆえに、「生」と「死」はいつの時代にも文学の主題であった。「男」と「女」はいつの時代にも戦い、愛しあってきた。「生」と「死」、「男」と「女」の問題は、人類がその終焉をみない限り、

京都大学医療技術短期大学部
College of Medical Technology, Kyoto University
1981年5月受付, 同年8月受領

文学の主題であり続けるであろう。

エイドリアン・リッチ (Adrienne Rich) (1929—) は、その詩や散文においてこれらの問題をはじめ、自然、宇宙、歴史、芸術さらに色々な差別、女性解放、母性の問題などを取りあげてきた。そして人間相互の関係や、人間を取り巻く事象との関係を洗い直し、正しいあり方を探り、その歪みをただそうとしてきた。とりわけ、女性の本来の姿を知り、男と女の関係の歪みをただすことは、早くからリッチにとって重要な問題であった。

本稿においては、父への挽歌である「闇のあとに」(After Dark)を中心に、「生」と「死」の問題を、そして父と娘という観点から「男」と「女」の問題の一端を考察したい。

エイドリアン・リッチの父、アーノルド・リッチは医師であったが、文学にも造詣が深く、ヴィクトリア朝の文学作品を多く所蔵していた。父は愛娘、エイドリアンに才能を見出し、彼女は少女時代から父に励まされ、導かれて詩を書き始めた。エイドリアンもまた父の期待によく応える優秀な娘であった。「父の手引きで、ブレイク、キーツ、テニソン、アーノルド、スィンバーンなどに親しみ、ラドクリフ大学においては、優等生の団体であるファイ・ビータ・カッパ (Phi Beta Kappa) に属し、すぐれた成績で学士号を得た。卒業を控えた1951年にW. H. オーデンに認められて処女詩集『世界の変化』(*A Change of World*) を出版した」¹⁾。父の影響は甚大であった。

生前の父とリッチ自身との関係について、リッチは「私は約20年の間ひとりの特定の男性のために詩を書いたのです。彼は私の作品を批評し、立派だとほめてくれ、そのために私は自分が本当に、‘特別な才能を持った’人間であるという自信を抱くようになりました。それだから当然私も彼に喜んでもらいたい、いやむしろ、悲しませてはならないという思いで詩を書いてきました²⁾」と述べている。父とのこのような関係は、リッチの内に父への限りない敬愛の気持をはぐくんできたが、また同時に無意識のうちに自己を抑圧する結果となったのである。成人したリッチが、父の死に際して父の存在の意味をどのように認識し、また実感したかを、以下において考察してゆきたい。

第四詩集『生に不可欠なもの』(*Necessities of Life*) に含まれる「闇のあとに」は、1964年、リッチが35才の時に書かれた父への挽歌である。

1.

You are falling asleep and I sit looking at you
old tree of life
old man whose death I wanted
I can't stir you up now.

Faintly a phonograph needle
whirs round in the last groove
eating my heart to dust.
That terrible record! how it played

down years, wherever I was
in foreign languages even
over and over, *I know you better*
than you know yourself I know

you better than you know
yourself I know
you until, self-maimed,
I limped off, torn at the roots,

stopped singing a whole year,
got a new body, new breath,
got children, croaked for words,
forgot to listen

or read your *mene tekel* fading on the wall,
woke up one morning
and knew myself your daughter.
Blood is a sacred poison.

Now, unasked, you give ground.
We only want to stifle
what's stifling us already.
Alive now, root to crown, I'd give

—oh, —something—not to know
our struggles now are ended.
I seem to hold you, cupped
in my hands, and disappearing.

When your memory fails—
no more to scourge my inconsistencies—
the sashcords of the world fly loose.
A window crashes

suddenly down. I go to the woodbox
and take a stick of kindling
to prop the sash again.
I grow protective toward the world.

1.

あなたは眠りつづけ私は見守る
いのちの老木よ
その死をひそかに願ったこともある老人よ
もうあなたを揺り起こすこともできない。

回転するレコードの溝もあとわずか
蓄音機の針が盤をこするかすかな音は
私の胸をこなごなに砕いてしまう。
なんとおそろしいレコード、何年も何年も

それは語りつづけた、私につきまとい
異国の言葉でさえ何度も何度も
語りかけた、私はあなたを知っている
あなたが自身を知るよりよく 私はあなたを

知っている あなたが自身を
知るよりよく 私はあなたを
知っている ついに私は不具になり、私は
足をひきずって立ち去った、根こぎにされて、

丸一年というものの歌うこともせず、
生まれ変わり、新しい息吹きを吸い込み、
子供達を産み、言葉にならない思いは溢れ、
壁に残るあなたのメネ テケルを

聴くことも読むことも忘れて日は過ぎ、
ある朝目覚めて知った
私があなたの娘であることを。
血の縁は^{えにし}聖なる毒。

今、あなたは退却する、要請もないのに。
私たちはただやっつけてやりたい
すでに私たちの方がやられているのだが。
今、からだ中に生気満ちわたる私は

——ああ、——何とかして——私たちの
戦いの終りを認めたくないのに。
私の両の手の凹みにあなたを守り包んで
いるようだ、それもやがて消え去ってゆく。

あなたの思い出がうすれゆき——
私の不徹底な態度を懲らしめてくれることもなくなる時、
世界に開く上げ下げ窓の吊り綱が切れる。
大きな音をたてて窓は落ち

閉じてしまう。私はたきぎ置場から
焚付けの粗朶を取ってきて

もう一度窓を支えよう。
私は世界を守ろうと思う。

第1部は各連4行から成る10連によって構成されている。

第1連において、エイドリアンは臨終の父に‘old tree of life’と呼びかけている。節くれ立った老父の体軀は「老木」と呼ぶにふさわしい。だが‘tree’には「あがないをなされたキリストの十字架」の意味がある。「系図」や「系譜」の意味もある。聖書にあるように、‘tree of life’はその実が限りなきいのちを与えるという「いのちの木」を意味する³⁾。父はいのちの源泉であり、その娘であるリッチは父がもたらした実であることを今、リッチは悟る。一方、かつての父は「その死をひそかに願ったこともある」とリッチに言わせるほど圧倒的な存在であった。父の、男として、家長としての力は彼女を圧迫しつづけた。力の権化であった父は、もう目を覚ますことがない。死を迎えようとしている事実の前には誰も為す術^{すべ}がない。自然の力に逆らうことはできない。第1連において‘old’が行を接して、しかも行の始まりにおいてくり返されることに注目したい。リッチが父の中に見たふたつのイメージ——生のイメージと死のイメージ——をこれらの‘old’が止場するがゆえに。

しずまりゆく、父の最期の息づかいは、音が消えたあとも未だレコードの溝をめぐってたてる、蓄音機の針のかすかなひびきに似ている。レコードが同じ音色をくり返し奏するようにくり返しきかされた父の言葉は、リッチの内部で何度も再生されてきた、「私はあなたを知っている あなたが自身を知るよりよく…」と。

第4連の後半から第6連においては、父の抑圧のためにいわば死に瀕したリッチの自己回復の過程が述べられている。‘maimed’, ‘limped’, ‘torn at the roots’, ‘new body’, ‘new breath’, ‘croaked’, ‘woke up’などの言葉からわかるように、自立の道は身体的体験を経てはじめて開けたのであった。リッチには関節炎の持病があり、先年来日した時⁴⁾にも足をひきずるように演壇にやってきたが、‘limped’はリッチ自身の足の故障のこと、父の抑圧と、その結果としての父からの離別の後の自立の苦悩、さらに‘limp’には「詩などの韻律が乱れる」意味もあることから、彼女が詩作の意欲や能力さえ失ったことなどを表わしていると考えられ、また最後の意味は第5連の‘Stopped singing’や‘croaked for words’とも関連づけられる。‘torn at the roots’についてもまた、ふたつの解釈がなされ得る。すなわち、リッチの自己が父によって根こぎにされ、そこなわれたという意味と、父の木(old tree)の根から離別したという意味と。そしてこのふたつはともに、彼女が自立のために経なければならない体験であった。

1953年、リッチはハーヴァードの経済学者、コンラッド(Alfred H. Conrad)と結婚した。この詩においてリッチは結婚のことをとりたてて述べていない。‘a new body’, ‘a new breath’^{えにし}と、自己の再生をうたう彼女の自立の認識を推進したのは、父以外の男性との縁を得たことよりもむしろ、3人の息子たちを世に送り出した母としての体験であったように思われる。1955年から2年ごとの出産と育児はリッチに精神的な、また時間的な余裕をほとんど与えなかった。3番目の子供を妊娠中の1958年8月の日記には「極度の気のふさぎと身体の疲労を感じない朝はほとんどない⁵⁾」と記されているが、実際、第1子を出産した1955年に第2詩集『ダイヤモンド磨き工その他の詩』(*Diamond Cutters & Other Poems*)が出版されて以来、第3詩集『義理の娘のスナップ写真』(*Snapshots of a Daughter-in-Law*)の出版までに8年の隔りがある。しかし、この苦闘の日日の間に抑圧者としての父の影響は次第に遠のいていった。

第6連の‘mene tekel’はカルデア人の王、ベルシャツアルにくだされた予言の言葉である。神か

ら送られた手の指が王の宮殿の塗り壁に書いた文字、メネ、テケルを予言者ダニエルは、『「メネ」とは、神があなたの治世を数えて終らせられたということです』（ダニエル書、5章、26節）、『「テケル」とは、あなたがはかりで量られて、目方の足りないことがわかったということです。』（ダニエル書、5章、27節）と解き明かした。その夜、ベルシャツアルは予言通り殺され、メディア人ダリヨスがその国を受け継いだ、と聖書は伝えている。

リッチにとって、父の言葉はダニエルのそのように深い洞察に満ち、娘を掌握した。だがリッチは父の強い影響を乗り越え、父の言葉を忘れることができるようになった。ここには、苦闘のあとに得た自立に対する誇りの気持さえ感じられる。

一方、メネ、テケルはベルシャツアル王の治世の終りを予言したものであるので、父の言葉を忘れたリッチは、父が自身の退却を予言していたにもかかわらず、自立の道に専念するあまり、来たるべき父の死について思いいたらなかったことを後悔しているとも解釈できよう。

ある朝目覚めて、リッチは父との縁^{えにし}を悟った。この認識がどのような過程を経て起ったかについては、一言も述べられていない。ただ、この時リッチが父の娘であるという自己の運命を受け入れる境地に達したことは明らかである。「目覚める」という意志によらない現象と「知る」という認識の働きとを結合する第2,3行はまことにすばらしいものと私には思われる。そして次行‘Blood is a sacred poison.’においては、積極的な意味をもつ‘sacred’と否定的な‘poison’とが結合し、血の縁^{えにし}の持つ業^{ごう}の深さがみごとに表現されている。

これまで父とのかかわりの経緯を思い返していたリッチは、今、ふたたび現実に戻される。第7連以下、第1部の後半において、彼女は父の存在の意味の大きさに思いいたるのである。

第7,8連において、今、父と立場を逆転し、生の優位に立つリッチは、時の力に抗うことはできないと知りながらも、何とかして父を生かし、父との意義ある戦いを続けてゆきたいと思う。永久に去ってゆこうとしている父はかけがえなく貴い。両の掌の凹みに包み込んで慈^{いと}しみたい思いさえするのであるが、死は喪失であり、目の前に横たわる父を別の形にして手許にとどめておくことはできない。ただ、父の存在の意味を受け継いでゆくほかない。

第9,10連において、父はリッチの最も身近な外界として把握される。父とのかかわりがなくなることは外界に開く窓が閉ざされてしまうことを意味する。リッチは突っかい棒で窓を支えてふたたび開けようとする。外界——それは彼女にとって戦いの場であり、今後もそうなのだが——外界に対して彼女は怖れず自己を開こうとするだけではなく、それを守っていこうとさえするのである。

「生に不可欠なもの」は「闘のあとに」と同じ第4詩集に含まれ、そのタイトルとなっている詩であるが、この詩においても、苦境と戦い、乗り越え、その世界で生きてゆこうとする「私」の決意に、リッチの開かれた自己意識を、彼女を取り巻く世界に対する積極的な姿勢を読み取ることができよう。

I'll

dare inhabit the world
trenchant in motion as an eel, solid

as a cabbage-head.

私は

この世界で生き抜こう
うなぎのように敏捷に行動し、

キャベツのように頑強に。

父が生を終えた今、彼女が世界との意義あるかかわり——戦い、かつそれを守ること——を持ち
つづけることによって、父の存在は意味あるものとなるであろう。

2.

Now let's away from prison—
Underground seizures!
I used to huddle in the grave
I'd dug for you and bite

my tongue for fear it would babble
—*Darling*—

I thought they'd find me there
someday, sitting upright, shrunken,

my hair like roots and in my lap
a mess of broken pottery—
wasted libation—
and you embalmed beside me.

No, let's away. Even now
there's a walk between doomed elms
(whose like we shall not see much longer)
and something—grass and water—

an old dream-photograph.
I'll sit with you there and tease you
for wisdom, if you like,
waiting till the blunt barge

bumps along the shore.
Poppies burn in the twilight
like smudge pots.
I think you hardly see me

but—this is the dream now—
your fears blow out,
off, over the water.
At the last, your hand feels steady.

2.

さあ、幽閉の獄屋から出よう——
冥界の捕縛から！
かつてはあなたが入ることをねがったこの墓所を
私は何度も訪い、胸かき抱き、唇をかんだ

あなたの口ぶりそのままにわれ知らず
——愛^{いと}しの娘よ——とつぶやくことがないように
私は想像した いつの日か
私もそこに坐り、干からび、

髪は木の根のように拡がり
こわれた土器^{かわらけ}はひざの辺りに散らばり
神酒はこぼれ、香詰め木伊乃の
あなたの傍らに居る私を。

いえいえ、出ましょう。滅びゆく楡の
木立の間の散歩道はまだ残っています
(楡の木ももう見られなくなるでしょう)
それにまだあります——草も水——も

もう昔の夢になってしまった光景です。
一緒にそこに坐り、お望みなら
知恵くらべを楽しみましょう
行方知れずの小舟が、

岸にぶつかる時まで。
罌粟^{けし}の花が黄昏時に赤く映えています
まるで畑のいぶし火のように。
あなたはもう私を見ることもなくなり

——今では夢でしかないのですもの——
でもあなたの不安は今去ってゆきます、
遠く、水面^{みなも}を吹かれて。
ついにあなたの手に安らぎがやってきたのです。

第2部は7連から成る。父は息絶え、葬られた。1—3連において、リッチは葬られた父の許を去りがたく、父と隣り合って墓所に坐する自分自身の姿さえ想像する。

生前の父の影響はレコードの回転が止ったはずの今、いっそう深くリッチの内部に滲透しており、思わず知らず、父の呼びかけ——愛しの娘よ——をつぶやきそうになる。父とのかかわりの深さを彼女は改めて認識させられる。木伊乃の父とともに居る地下の獄屋は、しかしながら、あまりにも

怪奇な、涸渇した、暗黒の世界である。おびえたジュリエットが薬を手にして想像した地下の納骨堂のように。

第4連第1行の‘No, let’s away.’は第1連冒頭の‘Now let’s away from prison.’とひびき合う。Gelpi が示唆しているように⁶⁾、この行は捕虜になったリア王が同じく捕われの身となった誠実な末娘コーディーリアに向かって言う‘Come, let’s away to prison.’ (Shakespeare, *King Lear*, V, iii, 8) (いやいや、さ、牢屋へ行こう)を連想させる。さらに、Robert Boyer も言っているように⁷⁾、第5連における父とふたりだけの夢の世界を描いた「一緒にそこに坐り、お望みなら知恵くらべを楽しみましょう」は、先の台詞にすぐ続けてリア王が語る「ふたりだけで籠の中の鳥のように歌おう……祈ったり、うたったり、昔話をしたり」を思い起こさせるのである。『リア王』との関連は他にも見出され得る。『リア王』においても父と娘は親木とその枝にたとえられ(IV, ii, 34-35)、老若の世代の交代の理はエドモンドの口を通して「青年が起きあがるのは老人が倒れる時だ」(III, iii, 26)と語られている。

牢屋へ誘うリア王とは異なり、リッチは父を黄泉の国から明るい陽光の下に連れ戻す。楡の木立の散歩道は父としばしば散策したところでもあろうか。楡の木はアメリカでよく見られる木であるが、近年病害 (elm disease) のために次第に滅びつつあると聞いている。リッチもこのことを懸念しているのであろう。

彼女の目に浮かぶ光景は、より漠然とした自然の事物——草地と水——に移ってゆく。へさきのない小舟は、どことも知れぬ死の国へ漂いゆくのかもしれない。波に浮かぶこの小舟は死の象徴であろう。モルオールに負わされた傷のために瀕死のトリスタンが従者もなくただひとり乗り込んで海原を漂った、櫂のない小舟のように⁸⁾。黄昏に赤く点在する罌粟の花は、生者はだれも行ったことのない黄泉の国へ人を誘う灯りのようである。またこの花は墓地に植えられることが多いと聞く。その成分は、ひととき、人をこの世から連れ出す不思議な力を持っている。リッチが父と語らい憩うこの夢の国は、しかしながら、閉ざされた地下の獄屋とは異なり、まことにみずみずしく、明るく、おだやかな自然の光景である。

父との別れは如何ともしがたいことであり、所詮この光景も夢に過ぎないけれども、リッチにとって父と過ごすこのひとときは鎮魂の意味を持っているのではないであろうか。死とは草繁り水溢れる自然に帰ること、死は人間にとって当然の帰結である。

最終行‘At the last, your hand feels steady.’は、彼女の詩がしばしばそうであるように、広く深い意味を簡潔な表現に凝縮し、この詩をしめくくるのにふさわしい。「手」のイメージは活力に溢れ、行動的な人物としての父を想像させる。しかしその父も今、生を終えた。リッチは感慨をこめてその生の完結を受け入れ、たたえる。彼女は父の存在を肯定するに到ったのである。このことは同時に、父とのかかわり方を、さらにリッチ自身を肯定することであると考えてよいであろう。

「闇のあとに」は「男」と「女」についてはほとんど問題にしていえないように見えるかも知れない。事実、「男」と「女」のありようは「父」と「娘」の関係のかけにかくれてしまっている。しかし、「私はあなたを知っている。あなたが自身を知るよりよく」と父が娘に言う、父と娘の関係は「男」と「女」の問題と無縁ではない。「男」と「女」のありようやその関係の歪みの原因は、現代まで確固として続いている家父長制社会機構に大いに帰せられるからである。

父との結びつきはこのように強力なものであったが、母の存在はリッチにとってどのような意味を持っていたであろうか。

彼女は母について、「私が母と呼ぶべき女は私が生まれるより前に黙らされてしまったのです」

(The woman/I needed to call my mother/was silenced before I was born.⁹⁾)と書いている。家父長制社会において、女は本然の自己を発揮することができず、その結果、自己をわれから歪め、失いがちであった。論文集『産み出す女』(*Of Woman Born*¹⁰⁾)は女の本然の姿を探求し、社会によって女が作られてきた経緯について論じている。この書物は祖母メアリ・グレイヴリとハッティ・ライスに捧げられている。リッチ自身の編纂になり、「今も進行中の自己の変遷の写実的な記録」である選集 *Poems Selected and New* (1950-1974) は彼女に最も身近な母ヘレンと姉シンシアに捧げられている。ここにもリッチの、女性への熱いねがいと共感とが感じられるのである。

文 献

- * テキストは *Adrienne Rich: Poems Selected and New, 1950-74*, 256 p, Norton, 1975 を用いた。
- * シェイクスピアからの引用はすべて *The Works of Shakespeare*, ed. W.G. Clark & W.A. Wright, Macmillan, London, 1961 による。
- * 聖書からの引用については「聖書」(日本聖書刊行会, 昭和45年9月1日発行)を用いた。
- 1) 加茂映子:『アメリカ女流作家群像』福田陸太郎編著, 336 P., 駸々堂, 京都, 1980.
- 2) *Adrienne Rich's Poetry*, ed. Barbara & Albert Gelpi, p. 91, Norton, 1975.
- 3) 創世紀 2章9節, 3章22節; ヨハネの黙示録22章2節.
- 4) エイドリアン・リッチは1978年11月から12月にかけて来日し, 12月2日京都国際会館会議場において「女に生まれて—母性の闇をさぐる」と題して講演を行なった。
- 5) *Adrienne Rich: of Woman Born*, p. 28, Norton, 1976.
- 6) *Adrienne Rich's Poetry*, p. 29, fn.
- 7) *Ibid.*, p. 151.
- 8) 『トリストラン・イゾー物語』第2章, ベデイエ編, 佐藤輝夫訳, 岩波文庫.
- 9) *Adrienne Rich: Poems Selected and New*, p. 228, from 'Reforming the Crystal'.
- 10) マクベスは小シーワードに Thou wast born of woman. But swords I smile at, weapons laugh to scorn, Brandish'd by man that's of a woman born. *Macbeth*: V, vii, 11-13, (きさまは女の腹から生まれたな。女が生んだ男なら, どんな武器を振りまわそうとせせら笑ってやるぞ)と言っている。追いつめられたマクベスが, それでもなお, おれは魔女から特別の力を授かったので, 並の男ではないのだぞという思いにすがって, いきまいてみせるのだが, この台詞は明らかに女性に対する侮蔑である。シェイクスピアが侮蔑的に用いたこの言葉を, リッチは女性の有する, 女性のための有する力——破壊の力ではなく, 存続の力を表わす言葉として, 表題に用いた。たとえ月満ちて生まれようと, またマクダフのように月足らずで「女の腹を引き裂いて」生まれようと, 「人はみな女から生まれる」ことは真理なのである。